
君とかくれんぼ、アナタと鬼ごっこ

水無月 彰汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君とかくれんぼ、アナタと鬼ごっこ

【Nコード】

N6689S

【作者名】

水無月 彰汰

【あらすじ】

「俺達を恋に落としてみせろ」

「ぼちぼち頑張ります」

不思議な巡り合わせで出逢った2人を巡ってのちぐはぐラブコメなんちゃってファンタジー。…かもしれない。

第一話：邂逅の前の序曲（笑）（前書き）

初投稿です。チキンハートです初めまして。

ずっとROM専で楽しませていただいていたのですが、すっかり自分も書いてしまいました。初めてがこんなんであええのんか。

暇で暇で仕方がない、という時にでも流し読みしちゃってください

^^

少しでも楽しんでいただけたら幸いです！

この作品はフィクションです。作中の世界は作者の完全オリジナルワールドになっております。

第一話：邂逅の前の序曲（笑）

私が目覚めた時、貴方は「初めまして」とは言わなかった。

不思議だった。だって私と貴方は、初対面のはずでしょう？

それでも嬉しかったの。

屈託のない笑顔を浮かべて、貴方は囁いてくれた。

「おはよう」と――

四月。

万人がおそらく例外なく眠たくなる、この季節。

新しい年、何かが始まる予感、桃色に染まる町並み、別れの後の
出会い、始まりの季節――

毎年のこととは言え、人間は何故こうも同じ事の繰り返しに飽き
ないのか。

甚だ疑問であるが、考えても詮無いことだった。

とにかく、そんなことは置いといて。

「おい。なんで朝飯が“一昨日の”晩飯の生き写しなんだろうな。
俺の目がおかしいのかしら」

「否」

「…まあ、しゃあねえか…お、虎三郎どーした。姉ちゃんに散歩連れてってもらったか」

「今日はあんたの番だろう」

「え、マジで」

「私の脳内予定ではそうなっている」

「ただの押しつけ」

ここ、堂本家の朝の一幕であるが、少し前まではこの家にいなかった人間がいた。

現在、この台所にいるのは2名。加え犬1匹。名前は「虎三郎」。よく「コサブロウ」や「トラサブロウ」と間違われるが、読みは「コゾウロウ」である。

そして彼女はメスである。

話が少しズレたが、先程説明した“いないはずの人間”というのは、主人公の少年の飼い犬に対する質問に答えた人物である。

“彼女”は平たく言えばこの家族の血縁者ではない。主人公達の通う中等部を卒業してから主人公の両親が預かっている娘である。もとより、家は隣接していたが。

名は高円寺 焰。読みは【こうえんじ えん】である。長く艶やかなストレートの黒髪を、頭の高い位置でポニーテールに結わえた少女で、熱い名前を持っているが本人は至って冷静且つ沈着な個性の持ち主であった。

チャームポイントは、能面も裸足で逃げ出しそうな鉄仮面と麻呂眉である。

主人公の彼は「あれは単なるマイペースの極致」と評しているが、果たしてその実態は。

「何故主人公の俺より先に紹介されるんだ」

「私の人徳以外のなにものでもないだろう」

「開始数行でこの仕打ち」

「焰ちゃんの言う人徳はもはやゲシュタルト崩壊よね」

「おはよう、刃。今朝も女神スマイルが目突き刺さるぜ」

「朝陽を背負っているから輪をかけて神々しい」

因に主人公は堂本家の長男、雪桜^{ゆきおつ}である。

焰と雪桜の会話に後光を背負いながら介入してきたのは、雪桜の妹^{しん}の刃である。腰まである淡い栗色の髪を緩やかなタテロールにした稀有な美少女である。

焰と兄の仲睦まじい様を微笑ましく見守りながら、刃は朝食にとりかかった。

「なんだか今しがた刃が俺にとって実に不名誉なことを考えた気がする」

「なんだと貴様、表出る」

「あらもう登校時間よ、兄さん」

言わずもがな、この3名は幼馴染みであつた。

「すっかりしていたが、今日って入学式兼始業式だったな……」
「すっかりしてようがどっかりしてようが俺達は不動の2年生だ」
「単なる留年乙」

現時刻7時43分。式自体は9時からなので、今の時間帯に学生がこの通学路に屯しているのは端から見ればおかしいのだが。

しかし、もちろん彼らは一般生徒とは違った意味合いでここに

るわけである。

「おい、俺と王芽をおまえのサボリと一緒にたにされちゃ困る。一生の恥だ。死んでくれ」

「そこまで言うか」

「まあまあ、影長に威緒：今はそんな低能で下衆な口喧嘩しとる場合やないやろ」

「たったあれだけの会話を笑顔で辛辣に片付けるおまえが好ましいぜ、俺は」

「俺はおまえ嫌いやけど」

「……！」

「やーいやーい」

「ところでなんで威緒はここにおるん？」

「……………」

「……………」

「え、てか自分らどちらさん？」

「……………！？」

「……………！？」

「冗談はこの辺にしろいて、さっさと行こか」

「どこからが冗談か気になるごっさ気になる」

一生の恥と切って捨てたのは、おみなえし女郎花 かげなが影長。

サボリで一年を棒に振ったのは、つくもがおぬお九十九ヶ丘 おつが威緒。

じんぐうつじ関西弁毒舌お洒落眼鏡は、神宮寺 おつが王芽。

以上3名、今年雪桜と焰が入学する保津坂学園高等部の先輩であり、

これから“彼女”と出逢うことになる主人公と、浅はかならぬ関

係になる予定の者達である。

「あ、てゆうか俺ら2年つつーことは自ずと不知火しらぬいとタメか」

「え…あ、そういや…げえ、あれとタメとかそんな…！」

「お前は自業自得。イヤなんはわかってるから早よ行くで」

「ゼツテエ威緒は遊ばれるよな。奇跡的に俺の仏心が働いたら骨は拾ってやるドンマイ」

「他人事だと思つて」

「俺らにとつては他人事」

岡沢 おかざわ 柚哉 ゆづや は非常に穏やかな人間である。

どのくらい穏やかかというと、授業中に開け放っていた窓から気紛れに迷い込んできた蝶々が、彼の頭部を憩いの場を選んでとしても気づかない程度の穏やかさである。

「寝ていたんだな」

更には友人に「おまえには才能がある」と無気力に告げられ、あれよあれよという間に生徒会役員に任ぜられたにも関わらず、彼は怒り動じることは愚か、狼狽えることすらなく与えられた任務を全うしてみせている。

「押し付けられたんだねえ」

「あの人は基本長いものには巻かれろ、ですもんね」

「岡沢の才能とは不屈の精神」

「柔軟すぎるんですよ」

要は岡沢という男は、根がどうにでもなれ主義なのであった。
思考を放棄したともいう。

「まあでも…一応仕事はきちんとこなしてくれますから、文句はありませんが」

小さく溜息を吐きつつそう零したのは、生徒会役員の1人である
副会長の大嶋おおしま 歩あゆむである。彼女は保津坂学園高等部生徒会唯一の常識人として有名であった。不本意ながら。

そんな彼女は今、件の岡沢という男を捜しに行く準備にとりかかっていた。

どうやら岡沢は、今日の式で使用するために用意した挨拶用の文章が書かれたカンペを、教室に忘れて来たと行って出て行ったきりまだ戻っておらず、歩が生徒会室に来てだいぶ経つのに未だその姿はなかった。

ぶっちゃけ逃げただけなのだろうが。

「阿呆ですか、あの人は」

やる気がある時とそうでない時の落差が激しい。

そのようなこと、許される訳がないのである。

歩がもう一度溜息を吐き出しながら身支度を整えていると、右斜め前の席に大人しく座っていた少年が不意に「おい」と声をかけてきた。

何故か彼は、パイプ椅子に小さなサイズの緑色のバランスボールを乗せた更にその上に胡座をかいて座していた。驚異的なバランス感覚である。

「なにそれコワイ」

「仙人ポーズ」

「意味がわかりません」

歩が薄手のパーカーを羽織って彼に向き合った時には、バランスボールは消え失せていた。

……というのは錯覚で、彼の背後の窓から綺麗な青空を背景に、美しい放物線を描いて緩やかに落下してゆく緑色の球体が見えた。直後、「もったいなあい」というのんびりとしたアニメ声が聞こえた。

「岡沢の居場所、見当はついているのか」

「…ええ、だいたい」

遠くからバサバサバサ…と聞こえるボールの着地音をBGMに、仙人に扮していた彼——会計の沖田^{おきた} 橘^{たちばな}は歩に問うた。

どうも、岡沢の行動は役員達にある程度筒抜けのようであった。残念な奴である。

「これを持って行くといい」

「…？ はあ…」

何やら沖田には妙策があるらしく、片方の口端を僅かに吊り上げて歩にA4サイズの包みを手渡してきた。

ニヒルな笑みを浮かべたかったのだろうが、はっきり言って不気味さに磨きがかかったただけであった。とは本人には言わない。

こう見えて沖田はガラスハートなのである。バレていないと思っているのは本人だけであった。

こんなところで沖田の心を決っているよりも優先すべきはあの阿呆である。

歩は直ぐさま生徒会室を後にした。

「…というか、なんなのでしょう。これ」

先程、沖田に手渡された包み。

彼は特に開封厳禁とは言っていなかった気がする。
もちろん歩は躊躇することなく開封した。

ガサ。

中には上級生にのみ出題される、本日提出の課題プリントが入っていた。

「パシリですか」

歩はこの時、用が済んだら沖田を軽く半殺しにすることを誓ったとか誓わなかったとか。

「あれ。俺これ以上進みたくないんだけど」

「案ずるな、私もだ」

学園の校門に近づくにつれ、生徒達が増えていた。
間もなく校門を潜ろうかという時に、奇遇にも雪桜と焰の意見が一致した。

その原因である2人の視線のその先にいたのは、自分達と同じ制服を身に纏った2人の少女である。

ツインテールの双子の美少女であった。

雪桜は自分の妹が桁外れな美少女なのであるが、なんとというか、視線の先にいるあの2人にはどうゆうわけかお近づきになりたくなかった。

だが、どうしても彼女らを避けて通れない理由があった。

「ものごつつ見てる」

「こっち見んな」

先程から彼の少女達が、じっ…とこちらを見つめているせいで身動きがとれないでいるのだ。

しかも2人のシルエツトは、間違い探しが無用の長物であるかのように、寸分の狂いもないのにも関わらず、それを態と打ち崩そうとするかのように決定的な違いがあった。

前髪である。

雪桜達から向かって右側の少女は、それ見えてんの？ と訊きたくなるような長さ。

反対に左隣にいる少女は、これでもか！ という程に短いパツツンの前髪であった。

そして、これでもか！ というくらいに見つめてきていた…というか睨んでいるようにも見える。

なんてったって、ものすごい眼力なのである。

「美人なんだがな」

「……」

何故か、隣の焰の機嫌が少し悪くなった。

しかし如何せん、もとより鉄仮面なため違いは微々たるものである。

訳がわからなかったが、雪桜は構うことなくこの状況の打開策を練っていた。

と――、

「キミが、堂本雪桜か」

「あ、はい」

焰を気にしつつも頭を捻っていたら、いつの間にやら眼前に麗しい颯め面が。

パツツンの方である。

「露ちゃん、あまり近づきすぎたら失礼よ」

「あ？ ……ああ、そうか……悪いな」

「いえいえ」

どうやらパツツンの方は“露”^{つゆ}というらしかった。

なんとも男勝りな口調の少女である。

それよりも。

「なんで俺の名前知ってんの」

もしかしたら雪桜が単に忘れていただけかとも思ったが、こんな美少女なら忘れる方が寧ろ困難である。

だとしたら、どこで知ったのか。

しばし露は黙考していたのだが、不意に顔を上げたかと思ったら探るような視線を差し向けてきた。吸い込まれそうな空色が雪桜を貫いた。

ああ、キレイだな。

そう感じた。

俺は、この色とよく似た色を、知っている――……

「まだ詳しくは教えられねえ」

「――ん？」

……何がだろ。というか、話が見えない。
急に、わからなくなった。

「まあ、これから3年間同じ学園に通うんだ。いくらでも知ってけるよ」

「はあ」

相変わらず理解不能ではあったが、雪桜はあまり細かいことは気にしないタイプである。

それに、そうだ。自分達にはまだまだ時間があるのだ。

「三姉妹ともども、これから3年間よろしくー雪桜」

「ああ……て、もしかして三つ子なのか？」

うえええ……こんなのが3人もかよ……と脳内で呻いていたら、ずっと黙っていたもう1人の方が「いえ」と歯切れよく答えた。
妙に耳に心地いい声である。

「姉が、今年2年生なんです」

「……ああ、そうゆうこと」

こんな美少女の姉貴って……想像できねえ……
などと暢気に考えていた雪桜は気づいていなかった。

「おい、ところでいいのか雪桜」

「なに？」

「や、あれ」

露がその小さな右手で自分の背後を指差している。謎な仕草であつた。

雪桜はブーツと彼女が指し示す先を目で追つた。ら…

「ま…待つて待つて焰」

ドスドスという吹き出しが見えそうな足取りで校門を潜る、幼馴染の小さな背中が見えた。

「悪い、俺もう行くわ」

「何言つてんだよ、俺達も行き先は同じだ」

「ご一緒させていただきますね」

結局、3人で焰を追いかけ駆け足で校門を潜ることとなった。

この日、雪桜の運命の歯車が密かに動き出したことには、まだ誰も気づいてはいない。

“彼ら” 以外には、誰も。

第一話：邂逅の前の序曲（笑）（後書き）

いいんか、俺こんなんでもいいのんか。

精進いたします…！

でも書くのはやっぱり楽しいですね。難しいですが…

そして作者は既に高校生活を忘れかけている。

第二話：邂逅の前の序曲（笑） - ?（前書き）

勢いがあるうちに…

さつそく2話目だ！ と思ったら内容はたいして進んじやいないってゆうね。

しかもまだメインが出逢ってすらいねえ。

そんな亀の歩みより遅い本作品ですが、少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

第二話：邂逅の前の序曲（笑） - ？

クシャミ2回連続ってのは、悪い噂をたてられているんだってね。

じゃあ、3回連続というのはなんなのだろう。

「知るか」

例えくだらないことだとしても、考えることを放棄してはいけないよ、兄弟。

特に我々のような曖昧な存在は、ね。

雪桜はどちらかと言えば気が長く淡泊な方である。

しかし、それは時と場合によりけりであり、ケースバイケースであつた。

ある時は、友人と待ち合わせしていたにも拘らず、軽く1時間以上も雨の中待たされた。

しかし雪桜はその友人に憤りを覚えることをしなかった。

後にその友人から「わり、忘れてた」と暴露された際には、もちろん説教という名の報復を無言実行に移した。

その辺くらいから雪桜には“幽鬼王”という、知る人ぞ知る実に謎で不本意な通り名がついてしまった。

どうやら相当恐ろしかったようなのである。失礼な。

因に、当時8才の小学2年生であった。末恐ろしいこと甚だしい。後に「堂本雪桜の逆鱗に触れるべからず」という暗黙の了解ができた原因を作ったある時は、給食中に牛乳を飲んでいるクラスメイトにちよっかいをかけて笑わせてやろうという、どの学年の子どもだいたい共通して行ふ悪戯に対して、雪桜も例外なくその標的になったのだが、普段から比較的温厚な性質^{タチ}であるために怒るかもしれないが多少のことなら許してくれるだろうというクラスメイト達の根拠のない思惑により、悪戯っ子達はいつもより過激な悪戯をしかけてしまったのである。

そう、しかけて“しまった”のである。

雪桜の牛乳の中にだけ、えげつない程の量の七味唐辛子と山葵を投下したのである。

ここでも言うが、末恐ろしいガキ共である。そんなもん態々自宅から持って来たんかい、と小1時間程詰問したいところである。

もちろん雪桜はやりわりと失礼のないように拒絶し抵抗したのだが、如何せん多勢に無勢であった。

仕方なく、馳走になった。

直後、暗転。

雪桜からしてみればそれは、ほんの一瞬の間のことのように感じていた。脳天を貫通したかのような錯覚を覚える程の強烈な辛さ……というか痛い熱さに、「あ、意識飛んだ」と確かに自身の脳内で呟いたのである。

妙に冷静であった。

…が、実際は昼休憩のほとんどを意識のない状態で過ごしたらしく、雪桜が意識を浮上させた頃には信じ難い現実が眼前に広がっていた。

教室内が阿鼻叫喚の地獄絵図と化していたのだ。しかもその中心にはボンヤリと佇む己がいた。

窓ガラスは砕けちり、給食は辺りに盛大に散乱しており、机もひとつとして以前の場所にはなく、中にはひどいもので真ん中がU字型に歪曲しているモノもある程だった。

相当な騒ぎになっていたらしく、教室の外には大勢の人集りが形成されていた。

しかし、そんな混乱の渦中であって一等不思議なことがあった。クラスメイト達である。彼らは確かに全員教室の隅っこに固まり縮こまって震えていたのだが、その中の誰一人として怪我を負っている者がいなかったのだ。

そのクラスメイト達に対し、穏やかな視線を投げて寄越し、雪桜は口を開いた。

「お腹空いたな」と。

直ぐさまクラスメイト達による献身的な給仕が行われたことは想像に難くない。

雪桜自身にはこの時、実際には何があったのか詳細には語られていない。

つまり、彼、雪桜という少年は単に穏やかで優しいだけの人間だと認識して友人のよしみというだけで過度にからかったり、いじったりしてはいけない人物なのである。

未だにブラックボックスだらけの彼の人格の全容は、小学生の頃だけで既に畏怖の対象として、教師も含め敬遠されるまでになってしまったのである。

生まれつきである、何を考えているのか判断できない虚ろな切れ

長の鋭い瞳も、彼の危うい存在感に良くも悪くも拍車をかけてしまっていた。

だがまあ、それについて本人が心に深い傷を負っているのかと思えば、答えは否と言える。

雪桜は、多くの友人を必要としない。

一握りの気の置けない友人や大切な家族がいてくれるだけで満足していたのだ。

中等部に上がってから、皆少しは大人に近づいたためか、雪桜を面白半分にからかつてくる者はいなくなっていた。

その頃には、男子にも女子にもある程度の距離感で接することが多くなっていた。

雪桜は基本、「去る者追わず、来るもの拒まず」の精神である。

その為、雪桜自身は気づいていなかったのだが、実は成長期に突入した頃から妙に女子生徒から話しかけられることが多くなっていたのであった。焰などは何故か終始不機嫌そうだったので、雪桜は寧ろそちらの方が気掛かりだったのであるが。

羨ましいことこの上ないが、本人は自覚している様子が皆無なので、同じ年頃の少年達はそのへんについては雪桜を詰つてもバチはあたらないと思われる。

そんなニブチン雪桜にも、気になる女の子くらいは、どうやらいるようなのだが。

まあ、その話は追々。

……で、非常に関係ない事柄も含め紆余曲折を経たが、とどのつまり何が言いたいのかというと。

雪桜は、どちらかと言えば、気が長く淡泊な方である。

現時刻、10時半オーヴァー。もう11時に手が届こうかとゆう

頃。

始業式兼入学式の入学式を終え始業式が開始してから、1時間以上が経過しようとしていた。

長い。これは長過ぎる。

右隣に座っている大柄な男子生徒などは、入学式こそ起きていたようだが始業式が始まるや否や、すぐに船を漕ぎ始め、今では小さな寝息が聞こえてくるまでになっていた。

てゆうか、イケメンは鼾すらかかない上に座ったままの寝姿までカッコイイのか。

先程こーっそり覗き見してみれば相当なイケメン君だった爆発しろ。周囲の女子が騒がしい。

と、そんなどうでもいいことに脳内を埋め尽くしつつ、暇で暇で今にも死にそうな身体から魂が脱走を謀ろうとするのを適度に阻止していた。

と、パラパラと生気をまったく感じ取れない拍手がそこかしこから聞こえたので顔を上げてみると、今にも化石と化しそうなおじいちゃん校長が覚束ない足元を全校生徒及び教師に披露しながら壇上から去って行くところであった。どうでもいいけど初っ端から気合いのいれ過ぎで入れ歯を飛ばすのはどうかと思う。

被害に遭った最前列の生徒などは「くたばれジジイ！」と愛のこもった野次を送っていた。

そんなこんなで、どうやら長い長い長い式もようやくと最終段階に差し掛かったようであった。

めでたしめでたし。

「何1人で納得してんだよ、雪桜」

「そんな生温い冷めたうどんのような視線で見つめないでくれるかな」

「何言ってんだ。春の陽射しのように柔らかでありながら、慈母の

ような慈愛に満ちた眼差しだろうが。というかなんだその例え」

「疲れる。この子疲れる」

「私が思うに、お2人ともどっこいどっこいです」

声をかけてきたのは、雪桜の左隣に着席していた校門前で未知との遭遇よろしく出逢って成り行きで一緒に登校してきた双子の美人姉妹である。

雪桜の隣は姉のパツツン眼力少女である露で、その向こう隣に妹の前髪少女、霧^{きり}がチョココンと可愛らしく座っていた。

露は男らしく座りながら（と言っても断じてがに股ではない）、雪桜にやる気のない視線を向けてきて文句を言ってきた。

「なんだよお前：普通俺達のような美少女がこーんな隣に座ったら、たいていの野郎は鼻の下伸ばしてあわよくば触れないか虎視眈々と狙い定め、舐め回すようにジロジロ不躰に気味悪い眼で眺めてきやがんのに。実につまんねえな、雪桜」

「それは自慢しているのか、自身の境遇を悲観しているのか、男を非難したいのか、俺の反応に不満があるのか、一体どれに論点の主軸を置いて攻めているのか理解しかねるんだけど」

「面白く生きる、少年。人生エンジョイしようぜ」

「大きなお世話だ。後おまえのツインテールの毛先があたってチクチクすんだけど」

「なんだ嬉しいのか雪桜。やはり所詮貴様も男だな」

「はっ倒していいかコイツ」

「いいけど、そろそろ式が終わるよ2人とも」

いいのか。

妹の霧のどうでもよさそうな発言に軽いショックを受けつつ、何故か嬉しそうに雪桜の左腕をポスポス殴ってくる露の奇行をアイアン・クロウで阻止しながら、雪桜は再度壇上を見上げた。

どうやら各クラスの担任を紹介しているところであるようだ。

「痛い痛いこれも愛か」という意味不明な呟きを漏らしながら悶えている露は放置しつつ、雪桜は遠く離れた座席に座っている焰を見つけた。

焰とはクラスが離れてしまった。

艶やかな黒髪が、体育館の開け放っている窓から吹く桜の花弁の混じった柔らかな春風に煽られ、淡い光沢を放ちながら優しく揺らめいている。

しばし、その幻想的な様に見蕩れた。

そういえば、今朝の焰からは微かにシトラスの香りが漂っていたように思う。

雪桜は香水を嗜まないが、香りなら柑橘系が一番落ち着いた。

あの香りを今なお辺りにまき散らしてんのかなーとぼんやり考えていると。

ふ、と視線を感じた。

雪桜は直感で感じ取った。

ああ、この視線には覚えがある。

それは頼りなげな、幼く懐かしい記憶。

ひどく不確かで、曖昧で、不明確で、淡い。

さながら白昼夢のように、ぼんやりとしていた。

瑞々しい林檎の香りを放つ黄金色のその人は、あの日、俺の目の前に佇んでいた。

「もう1度だけ、チャンスをやろう」

消えてしまいそうな意識の中、子守唄のようだと感じたのを今でも鮮明に憶えている。

「い、——おい、……おい……き……ゆき……！」

遠くから少女の声が聞こえる。しかも呼ばれている気がする。とても聴き心地のいい声だ、と思った。
もう少し、このまま聴いていたい——…

「起きやがれ」

突如聞こえた、何やらドスの利いた低い声。

直後、

ガスッ！！！！

「おっと」

「やっとお目覚めか、この野郎」

どうやらいつの間にか眠っていたようである。といっても、ほんの数分であるが。

しかも隣人の肩を無断で借りていたようだった。

何やら殴られたらしく、煙が立ち上るタンコブのできた寝起きのせいで働かない頭を、強めに瞬きすることによって覚醒の手助けをする。ついでに眼も擦る。

と、その手首を掴んだ手があった。大きな手である。

「擦んな、眼え傷つくぞ。ガキかてめえ」

「お母さんですか」

「ケツ引つ叩くぞ」

それは勘弁。

そう呟き、雪桜はその手の持ち主の顔を見た。
見覚えがあった。確かにあった。

「眠りの森の美男だ」

「は？」

そう言って幾分間拔けな表情を浮かべたのは、雪桜の右隣に座っていた男子生徒であった。

彼は何やら珍獣でも見つけたような視線を向けてきている。
どうゆうことなの。

「や、さつき式の最中に寝てただろ」

「ああ、まあ確かに…」

何故か急に脱力してしまった目の前の眠りのイケメン君。

これから同じクラスなのだから、名前を聞いておこうと思い雪桜は改めて向き合った。

「あーなんだか今更だけど俺…」

「堂本雪桜、だろ。さつきからお前の後ろにいる双子がしつこくお

前のこと呼んでたからな」

言われて、雪桜は背後を振り返ってみた。
いた。2人とも。

しかし何故露の方は泣きそうな顔でこちらを見つめているのか。
謎。解けなさそうな謎。

周囲の生徒達は、そんな露達を見て頬を染めているし。しかも野郎に至ってはなんでか俺を睨んでくるし。なんなわけ。

振り向いてからこの間、0・5秒。

「なんなん、新手のイジメか」

「雪桜、魔されてたぞ」

「え？」

唐突に声をかけてきた露。見れば、拗ねたようにその小さな唇を尖らせ、雪桜を睨んできた。

そんな顔も可愛い。等とぼざいている場合じゃなかった。

「魔されてたあ？ 俺が？」

雪桜が鸚鵡返しに言うと、こくん、と露と霧は小さく頷いてみせた。

「何か怖い夢でも見てるんじゃないかねえかって、こいつらずっとお前のこと必死で起こそうとしてたぜ。そのくせテメエは俺の肩を占領したまま微動だにしねえし」

そう言って、イケメン君は徐に立ち上がった。「行かねえと閉め出されるぜ」と言うので周りを見てみれば、なるほど、徐々に生徒達は教室に向かっていているようである。

雪桜は「どっこいせ」と言いながら立ち上がった。その際に霧に「幾つなんですか」と言われた。ほっといてプリーズ。そこで、雪桜は相手の名前を聞き忘れていたことに気づいた。忘れられていたのかと思いきや、雪桜達の準備が終わるまで待っていてくれたその男子生徒は、こちらに振り向き様、ほんの少し笑みを浮かべながら名乗ってくれた。

「俺は早乙女 涼だ。よろしく堂本」

雪桜は挨拶しながら、「背の高いなー」なんて考えていた。

目の前のベンチの上で眠っていた黒猫が目を覚ました。しばらく琥珀の瞳を臨むことができた。

丸めていた身体をぐいーん、と伸ばしている様は、ともしれば人間がしたら滑稽に見えなくもないのに、彼らがするとどこか優雅で絵になった。

思わず彼は、「ははは」と小さく声に出して笑っていた。その際に驚いてしまったのか、将又自分の近くに人間がいたのが気に食わなかったのか、彼の黒猫はさっさと立ち去ってしまった。

その後ろ姿は、さながら気位の高いお嬢様のようなものであった。もしかしたらキミは女の子だったのかな、そんなことを呟いた。その時ふと風が吹き、彼の柔らかな前髪を微かに揺らした。

「そういえば、今年の春一番はいつ吹いたんだろう」

ポツリと呟く声に返ってくる声はない。当たり前だ、今ここには

彼しかいなかった。

と、思っていたのだが。

「一昨日ですよ、先輩」

「おや、桐生君」

独り言のつもりで呟いたのが、まさか返事が返ってくるとは思っていなかったはずであるのに、彼には驚いた様子はないようである。座り込んでいたのを、「えんやこらっしょ」という微妙に歯切れの悪い変な掛声とともに立ち上がり、話しかけてきた少年に向き合った。その顔には相変わらず小さな笑みが浮かんでいる。

「まったく先輩は…挨拶はちゃんとしてくれたからいいものの、終わったら颯爽と消えるって…アンタそれでも会長ですか」

「いつ如何なる時も、自分のペースを崩すのはよくない、よくないよ桐生君」

「紛う事なき屁理屈ですよね」

どうやら桐生君、と呼ばれた少年に相對しているのはこの学園の生徒会長のようだ。

陽だまりのような暖かな印象を否応なく与えてくる人である。

そんな生徒会長ののんびりとした優しい雰囲気きりゆうに、ふらふらと人は寄ってくるのかもしれないな、と桐生きりゆう 音猫ねねこは考えていた。少なくとも、自分はそうだった。

と、唐突に会長が「あはは」と笑った。なんだ、ついにとち狂ったか。

「さっきまでここにいた黒猫が化けて出てきた、て風にもとれるよね」

「…はい？」

普段からこの先輩の脈絡のない話には慣れているつもりだが、それでもいつでも身構えているわけでもないの、この時のように突如話題を転換されてしまうと一瞬付いていけないのは致し方ないことだろう。

「さっき、黒猫とすれ違わなかった？」

「……ああ、そういえば」

音猫はここに到着する直前に、黒猫とすれ違ったことを思い出した。

もしかして。

「……この俺がその黒猫の化身だとしても？」

「バトンタッチ。ね、ロマンチックじゃない？」

会長は相変わらず頭にラフレシア級の花が咲いているようである。……ラフレシアが花の中でどれだけの影響力があるのかは定かではないが。

それに、音猫は花が嫌いだった。

「……とりあえず先輩、早急に生徒会室に戻って下さいよ」

「うん？ まだ他にしなきゃいけないことあったっけ」

「……………」

「冗談だよ、そんな化け猫みたいな形相で睨まないでってば」

「まだ引き摺ってんですか、そのネタ」

不意に会長が空を見上げた。それに倣い、音猫も空を仰ぐ。
いい天気だ。本当に。

……でも何故だろうか、嵐の前の静けさともいうのだろうか。

僅かに胸騒ぎがする。

「恋の馬鹿騒ぎ、だね」

一瞬、誰がその言葉を発したのか、音猫はわからなかった。空を仰いでいた首を、ゆっくり下ろした。ひた、と目の前の会長に視線をロックオンする。

会長は、なんとというか、やっぱり微笑んでいた。

「…なんですか？ 恋？ 馬鹿騒ぎ？」

「なんとなく」

いや意味わからんちん。

まともに取り合わない方が、賢明なんだろうけれど。

音猫にしては珍しく、会長の戯言にノってみることにした。

「馬鹿どもが、騒ぐんですかねー…」

「桐生君も混ざってみてはいかが？」

「俺は遠慮します」

そろそろ本当に戻らないと、大嶋副会長に怒られてしまう。

そうなるのであれば同じ生徒会室にいるのが苦痛に感じる程、居心地が悪くなってしまう。それは困る。断じて阻止せねばなるまい。

音猫は、会長に再度催促するために口を開こうとした。んだが。

バシャアアアアアアア……！！！！！！

「……」

「……あれ」

おかしいな、今日は快晴なのに。
そう会長がぼんやり呟くと同時に、今度はプラスチック製の特大巴ケツが空から降ってきた。

ゴインツ！ という音とともに、会長のずぶ濡れの頭にヒットした。地味に痛そうだ。

現に、会長は頭を押さえて蹲っている。可愛いそうに（笑）

「会長ー！ そんなところで音猫ちゃん口説いてないで早く帰ってきなよー！」

頭上から聞こえてきたアニメ声に、会長に向けていた憐憫の眼差しを引つ込め元の表情に切り替えつつ、再度見上げた。空ではなく、校舎を。

「態々水汲んできたんですか、胤屋さん」

「会長のためなら、胤屋 円子、弛まぬ努力を重ねる所存だよ」

「……方向性が著しく間違っている気がしてならない……」

「あ、会長大丈夫ですか」

「心配しているようにみせかけて手すら差し伸べない君は、やはりいい性格してると思うよ」

「さっさと行きますよ」

「扱い雑っぽくない？ あれ？」

ぶちぶち文句を言いつつ、生徒会長、岡沢柚哉は後輩と歩き出した。

ニヤア…

猫の鳴き声が、聞こえた。

前を歩く音猫には聞こえなかったのか、気づく素振りすら見せずさっさと行ってしまった。

柚哉は立ち止まり、自分の足元の茂みに目をやった。

そこには、先程姿を消したと思っていた黒猫がいた。じっとこちらを見上げている。

その無垢な瞳には、一体どのような想いが込められているんだろう、と柚哉は考える。

「キミも見物に来たのかな」

猫が答えてくれるとは思っていない。

しかし、柚哉は無意識に黒猫に尋ねていた。今はまだ、自分と“彼ら”にしか見えていない【未来】のことについての期待と不安を胸に秘めながら。

それでも、柚哉は笑う。

「さすがの“彼ら”も、キミのような美しいお嬢さんからは見物料はとらないだろうね」

そう言っつて柚哉は黒猫の小さな頭を、優しく撫でた。

黒猫は、

ミィ、と嬉しそうに鳴いた。

第二話：邂逅の前の序曲（笑） - ?（後書き）

さて、次はどうしようかな。

第三話：役者が揃い始める舞台袖（前書き）

ほんの少し、ほんの少しばかり話に展開が。

まあホントに瑣末な差ですが。

だんだんとメイン、サブ共にキャラクター達が出揃いつつあります。

彼らの実態は、追々書くつもりです。

それでは、暇つぶしにどうぞ。

第三話：役者が揃い始める舞台袖

あいつは言ったんだ。妹には、すげえ“チカラ”があるって。そんなことは俺だって気づいていた。ただ、なんとなく気づかないフリをしていただけ。

彼女が笑ってられるなら、俺はそれだけで心満たされた。

それだけで。

よかったのに。

時々忘れそうになるけれど、どうしてこんな事になっちまったんだか。

「早乙女は外部生だったんか」

「ああ、この大学に進みてえと思ってな」

それを聞いて雪桜は、人が大勢いる食堂だということも忘れ、思わず「え！」と驚きの声をあげていた。

それもそのはずで、雪桜達が通うここ保津坂学園は、小、中、高、大とエスカレーター式の私立学園であり、その知名度は非常に高く

それに比例して偏差値も高い。特に高等部からの入学や編入だと、ちよつとやそつとじゃ入れない程難易度が上がるのである。その為か、高等部からの外部生は非常に少ない。

雪桜は初等部の頃からこの学園の生徒であるため、あまり気にした事はなかったのだが、以前たまたまこの高等部の入学試験及び編入試験を見たことがあった。雪桜は地獄を見た。

そして彼、今回高等部に上がり同じクラスになった早乙女涼は、なんと外部生な上にここの超難関だと言われる大学を希望しているという。

まさに勇者。

「お前なら例えライフが0になったとしてもゾンビとなって黄泉の国から蘇ってこれるだろうさグッドラック」

「何故大学進学の話がその飛躍した返答に繋がるのか皆目見当もつかねえが、それは息継ぎなしで吐かなければならない台詞なのか」

コトン、と涼は手に持っていた紙コップを机に置いた。

コーヒーはブラックしか飲まないという。そんなとこまで男前か。イケメンなど滅びるがよい。

「俺の勝手な主観では、ブラックを飲める男ってのはハードボイルドなんだ」

「コーヒーひとつでそんな殺伐とした人生送ってない」

「流石だな、早乙女。そこに食いつくか」

「いやいや、お前の意識の中までは食いつけねえだろ」

「ところでハードボイルドって何」

「自信満々に使用してたよな、さつき」

涼は、再度コッソ、と紙コップを机に打ち付けた。その表情は実に穏やかだった。

「知恵蔵2011の解説から丸々、そのまま引用して説明すんなら……」

「おお？」

一瞬、雪桜達のいる区画だけが、隔離されたかのように静かになった。

もちろん気のせいだけだ。

「『1920年代アメリカにおいて、自らも探偵業に従事した経験を持つダシル・ハメットが、雑誌「ブラック・マスク」を舞台に確立したジャンル。探偵サム・スペードの活躍する『マルタの鷹』（1930年）が、このジャンルの記念碑的長編。ハードボイルド探偵小説は以後、ハメットの、徹底して贅肉を削ぎ落とした、乾いた文体を継承しつつ、レイモンド・チャンドラーのフィリップ・マローウ、ロス・マクドナルドのリユウ・アーチャー、ミッキー・スピレインのマイク・ハマーなど、数々のスペードの後継者を生んで行く。ハードボイルドのヒーローは、誰の助力も借りずに、己の名誉をかけた掟を守って、タフに生き延びていく。都市に棲息する独身者として、日常生活の細部には徹底してこだわる。現実主義者で皮肉屋でありながら、捜査対象にはしばしば感情的に巻き込まれる。時には犯罪捜査のみならず、判決を、処刑を下す役を買って出ることもある。ハードボイルドの物語構造は、騎士物語と同じく、探求と発見から成っている。アメリカ産ハードボイルド探偵小説は、50年代、日本に翻訳紹介された。80年代より、国産ミステリーに占める割合は確実に上昇していき、生島治郎、北方謙三、原燎、藤田宜永、大沢在昌、白川道、藤原伊織などの人気作家を擁して、確固たる位置を占めている。』……だそうだ。今でも検索すればこの程度なら出てくんど」

「9割9分9厘も頭に入んなかった」

「ほぼ全てだな」

まあ、だいたいはい「非情なこと。人情や感傷に動かされないで、さめていること。また、そのさま」といった内容として扱われることがほとんどなんだが。

そう言っただけは、自身の完全記憶能力を事も無げに披露した挙句、指先で弄んでいた紙コップを、背後も確認せずに突然後方に放り投げた。

キレイな放物線を描いたソレは、支柱にあたった後、恐ろしく正確にゴミ箱に吸収されていた。勇者ではなく超人だった。

もう何も言わない。

「アレだな、“天は二物を与えず”ってのは当時の人間の現実逃避だったわけだ」

「俺はお前の内なる世界に付いていける自信がまったくない」

おかしいな。それ刃にも言われたことあるぞ。

女心は、本当によく転がる。

いや、それは男性にしてもそうなのかもしれないけれど。

それにしただけ、女のそれは時に、本当に予期せぬ方向へ変貌を遂げる。

ところでなんで人は失恋すると、こう、なんというか悟った気分になるのだろう。

と、どこかズレつつもそんな漠然とした途方もない事柄を、脳内に閃かせては消してを繰り返しながら、サボタージュ常習犯の九十九ヶ丘 威緒は自身の頭上を穏やかに流れる綿雲を眺めていた。

「知つとんか、威緒。そもそも“サボタージュ”言うんは労働者の争議行為の1つであつて、労働者が団結して仕事の能率を落とし、使用者側に損害を与えて紛争の解決を迫ることを言うんやで」

「……何が言いたいのかな、王芽君」

「威緒が………労働者（笑）」

「勤労感謝の日には寧ろ殺されて然るべき存在だよな」

「散々な言われようだ。そしてやっぱり俺に死んでほしいのか影長」

昼下がり、屋上。

影長、威緒、王芽の3人はいつもの如く屋上に来ていた。

どこかの不良校よろしくここは俺の縄張りだー、とか、そんな時代錯誤なことは起こらない。実に平和な空間だった。雨天時には、パラソルが開く。けどあんまり役には立たない。盛大に濡れるのである。

「てか、意外」

「はあ」

「ああ？」

上から威緒、王芽、影長。

それぞれ干渉しあうことなく好き勝手に昼休憩を満喫していたため、威緒の語りかけに2人はいいかげんに返答した。ように見えたが。

「……ずいぶんおざなりな返事だな、お2人さん。そんなにその漫画は面白いの」

「違うな、威緒。影長はなおざり返事やけど、俺はおざり返事や」
「え」

「同じ意味じゃねえの」

「まあ厳密にはちゃうな。…ところでなんやねん、威緒。なんか言いかけてへんかった？」

「あ、ああ、それな…」

実は威緒が話したす直前、この3人がいた校舎の1階の階段に足をかけた人物がいた。

そして、その足の持ち主は、勢い良く地を蹴った。

「“あいつ”がまさか、自分に好意を抱く相手と友好関係を築き続けてるつてのが」

「……あ、不知火のことか」

「それってある意味残酷なことしとんよな」

「ん、まあでも不知火だし」

「なんや嫉妬か威緒、お疲れさん」

「ありがとう」

「んーでもよ、どの道将来的にも生産性のないカップリングだしな。若気の至りってことでいんじゃないね」

「ちょ、影長の口から“若気の至り”なんてレアな日本語が聞けるとは思わなかった。爆笑」

「俺も疲れてんだよ。最近の若者は実に無気力且つ躍動感溢れている。いいことだ」

「…どうしよう王芽。ついに影長が俺に攻撃すらしてこなくなった。しかもなんか長老モード」

「感涙ものやな」

「何故に」

「威緒のDM疑惑は確信に変わり、白日の下に晒される。これに思いつくことはねえ。くたばれ威緒」

「俺が!？」

ボタン。

「あー、いたいた。いたわ」

突如広い空間に響き渡った、どこか非凡で美しい“低音”。

1度耳にすれば忘れられないような気にさせる、それは人の声であつた。

唐突な闖入者に、屋上にいた3人は思わず固まつた。

威緒に至つては心なしか全身から不透明な汁が出ている。もちろん単なる冷汗である。

しかも、その人物というのが、先程まで話題に出ていた――…

「こんなところで油売つてる場合じゃねえっスよ、百先輩^{もも}」

その人物は、こちらに寄ってくる様子はなく開けた扉に凭れかつてこちらを気怠げに見つめていた。正確には、威緒を見ていた。

その白く麗しい顔^{かんばせ}には、青磁のような、どこか儚さを感じさせる輝きを放つ双眸が備わっていた。

吸い込まれそうだ。

と言つたのは、彼女だったか。彼女はこの瞳が一等好きだと、言っていた。

威緒はどこか他人事のように考えていた。

だから、次いで言われた言葉がすぐには理解できなかった。

「はーちゃんが教室で先輩のこと探してる」

はーちゃん。はーちゃん。縹^{はなだ}。沖田 縹。

威緒の。

想い人。

そして、

そして、

「おらさつさで行け」

「……お前ら、確か同じ委員会やったな」

「……そうだった」

背中を押す影長に励まされ、威緒は立ち上がった。

呼びにきた件の人物の元へ。

威緒はどこか緊張しながら対峙した。何故同じクラスだが1つ年下に対して緊張しなければならぬのか。

答えは簡単。至極単純。

相対した人物にどのように接すればいいのか、いまいち掴めないでいる。知り合ってけっこう経つのに、未だに距離感を正確に測れないでいた。

イレギュラーな奴だ。とてつもなく。

存在感も。影響力も。性格も。……“あれ”も。

目の前の相手が、ニシツ、と笑んだ。目線は、然程変わらない。

正直、威緒は不覚にも「あ、可愛い」と思った。不可抗力だ、と心中の顰に言い訳をする。

威緒の気持ちなど、顰は預かり知らないことなただけけれど。

「待ちくたびれちゃって、まあ」

スイ、と相手が視線を逸らした。

威緒は何故か、その自然な行動に目が吸い寄せられた。

「帰っちゃうかもしんねえよ？ あいつ、優しそうに見えて腹黒いから」

走れば？

威緒はもちろん走り出した。後ろから微かに笑い声が聞こえた気がした。

夜。

不知火 夜。

威緒達のクラスメイトで、

縹の、想い人。

「新歓なんて滅びろ」

「入ってくるなり物騒だな。愉快愉快」

「一瞬目眩がしました」

生徒会室は、必ずと言っていい程全員集合という状態に至らない。特に、今年度の新生徒会は。

「協調性皆無」

「貴方がそれを言いますか」

「そもそも君（会長）自体、根無し草なところがあるからな」

今現在この室内にいるのは、先程入室して来た柚哉を含め3名である。

口調でお分かりかと思うが、敬語口調なのは副会長の歩、もう1人は会計の橘である。

たいがい、この2人はいつもいるのだが、その出席目的（？）は意味合いがまったく違っていい程異なる。言わずもがな、歩は真面目に仕事をしにきている。

対して、橘は。

「何それ」

「蜜柑」

「てゆうか来客用です。ソレ」

柚哉が室内に入るなり橘の右手にあるものを見て固まった。

蜜柑。そう、確かに彼の右手にあるものは蜜柑であった。だがしかし。

「あれ。蜜柑って浮遊するもんだっ たかな」

「寝言は寝て言って下さい、会長」

「こうするとより蜜柑は甘酸っぱさを際立たせることが可能なんだよ、柚哉」

「人類には早過ぎる味開発発想」

「馥郁たる柑橘系の香りに加え、宇宙にいる気分を味わえる」

「一石二鳥だね」

「仕事しないならどうぞお引き取り下さい。お2人とも」

「歩もカリカリしないでよ」

「握り潰しますよ」
「どこを」

なんとなく蜜柑ではないと察知した2人。
まあ、だいたいいつもの風景である。

橘の珍行動は昔からであつたため、今更腰を抜かすことは……

……時折ある。

それはさておき。

「何かいい案、ありましたか」

新歓。新入生歓迎会である。保津坂学園では、来月5月中旬に予定されている。

「ううん…それなんだよね」

「俺達の時は、確か校内全域を使用した宝探しだったな」

「過程はしんどかったですが、景品が豪華でしたからね。好評でした」

「ああ、一番豪華なので確かオーストラリア1週間だったね」

「ホワイトタイガーは美しかった」

「当たったのはキミか」

「相変わらず存在自体がちゃっかり者ですよ。憎たらしいです」

新歓で何を催すのかは、明確な通例はない。毎年2、3年生にアンケートをとる方法をとっているのだが、今回はなかなか生徒会役員達の心を射止める案が出てきていない様であった。

それ以前に今年度の生徒会役員がクセの強い連中の集まりであることがそもそもの原因だというのも、あるにはある。

単に、普通じゃつまらん、というだけの話である。

要は、駄々をこねている。

「私は無難な方が賢明だと思っんですけれど」

副会長である歩以外は、であつた。

結局、最終的に歩が総指揮をとるはめに陥るのである。こうなると、生徒会唯一の常識人という立ち位置には些か同情を憶えざるを得ない。南無三。

「やっぱ、ざっくりあつさりねっちよりぱっくりした方がいい」

「抽象的の範疇にすらカテゴライズできません」

「なんかソレだと、すんごく後味悪いのが出来上がりそうだよね」

「罰ゲームにシュールストレミング入りスライム失敗作風呂に1時間浸かってもらう、なんてどうだろうか」

「嚙、凄惨な現場になるだろうね」

「その前にそのゲーム内容の全貌を明かしてみて下さい。捻り潰しますので」

これでは二進も三進もいかない。ので。

「全員集合です」

歩は言うが早いか、早速携帯で他の役員達をメールで呼びかけた。これで何人来るやら。

「桐生君は確実に来てくれそうだよね」

「信じるに値するのは、もはや彼だけですな。性格に多少の難はあります」

「桐生君はまだ可愛らしい方じゃないかな…どうだろ」

「俺、彼だけはなんか苦手だ」

「はっ、いい気味です」

「やだ我らが副会長殿が鼻で笑った。幸先不安、一寸先は闇」

「あら、ほとんど全員から返信がきました」

「珍しいね」

「ちょっと待ってて下さい。読み上げます」

TO: 胤屋 円子

S b : R e : 全員集合してください

[illegible]

今、百合ちゃんというよ（　　）b

でもね、なんか百合ちゃん変なこと

言っ
てん
のー。
面白
そう
だか
らち
よ

つと相手して行きます（、、）v

適当になんか進めてて下さいエ……

あ！ 会長！ 安心して下さい！

円子の貴方への愛は一生不滅です！

バルスも効きません。無効です。

トオ：桐生 音猫

S b : 了解しました。

[illegible]

今現在、向かっているところです。

送れて申し訳ありません。

TO: 小美羽 百合也

S b : R e : 全員集合してください

[illegible]

行きたいのは山々なんだけどね、歩。

俺を待っている人がいるんだ。これは

もう放つてはおけないよな。

まさに運命。今決めた。

そうこう言っているうちに行ってしまう。そうゆう訳だから、大変心痛むけれど、俺は行くよ。あでいおす。ばいばいきん！

To: 宇鬼枝 汀

Subject: 全員集合してください

＝＝＝＝＝＝＝＝

(このメールには本文はありません)

「イマイチ人物像掴みにくい且つ個性的なメールだな、相変わらず」

「胤屋は一体何を狙っているのか俺には分からないよ」

「一番腹立たしいのはダントツで小美羽おいはですね。死ねばいいのに」

「宇鬼枝君は………なんかもういいや」

「結局、マトモなのは桐生君だけだったね」

「この分だと円子も来てくれるかもしれませんね」

その場にいた全員が、思わず溜息を吐いた。

本当に、先が思いやられる。

柚哉は窓からこっそりと、やや陽の傾き始めた空を見上げた。

とりあえず、

「俺は職員室に資料をもらってくるよ」

「逃走厳禁です」

不安に胸膨らませました。実に心躍らない。

第三話：役者が揃い始める舞台袖（後書き）

現実逃避は得意な会長。どうよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689s/>

君とかくれんぼ、アナタと鬼ごっこ

2011年10月9日01時09分発行